



秋田県の河川、湖沼には約130種類の淡水魚が生息している。近年これら在来魚の生息地に、外来種であるオオクチバスの姿を見ることが多くなってきている。オオクチバスは肉食性で、繁殖力が強く、環境適応力に優れているため在来魚への影響が憂慮されている。秋田淡水魚研究会は、平成13年10月大森山動物園内の沼をフィールドに、近くの小学生を対象に自然観察会を開催し、平成14年3月に広く一般県民を対象に、オオクチバスによる被害の実態や対策に関する「ざっこシンポジウム」を開催した。

以下、報告書から抜粋してシンポジウムの内容を報告します。

〔自然観察会〕

実施日：平成13年10月20日

場 所：大森山動物園内・塩曳き潟

参加者：浜田小学校5年生児童、秋田淡水魚研究会会員など50名

浜田小学校5年生児童は、総合学習の時間を利用して浜田地区について調査をしているが、今回の自然観察会もその授業の一環として塩曳き潟の魚類採集を実施した。魚類は3科5種で、環境省及び秋田県のレッドリストに記載されているシナイモツゴ、アカヒレタビラの生息を確認した。

〔ざっこシンポジウム〕

実施日：平成14年3月17日

場 所：県生涯学習センター

参加者：約200名

－シンポジウムの概要－

- ・ 基調講演 「絶滅のおそれがある秋田県の淡水魚」

杉山秀樹（秋田淡水魚研究会代表、秋田県水産振興センター）

県内で絶滅が危惧されている主な淡水魚を例示し、このような危機的状況が生息環境の悪化とブラックバス(オオクチバス)に代表される外来魚に起因する。生息環境の改善については、既に「魚のすめる川づくり」など前向きな取組が行われるようになった。

しかし、外来魚については県内69市町村のうち7割に相当する48市町村でブラックバスの生息が確認されており、昨年はブルーギルが釣り上げられたとの情報もある。秋田県では平成13年8月から今年2月にかけて、ため池11ヶ所、河川9ヶ所で外来魚駆除を実施し、約7千匹のオオクチバスを捕獲した。オオクチバスの胃内容物調査で、カエル類、ネズミ、小鳥、ルアー、共食いを示すオオクチバスが見られ、在来魚の生息環境は極めて深刻な状況にある。

・ パネルディスカッション

パネリスト：秋月岩魚（写真家、「ブラックバスがメダカを食う」の著者）

中井克樹（琵琶湖博物館学芸員）

安田貞則（八郎潟内水面増殖漁業協同組合）

杉山秀樹（秋田淡水魚研究会代表）

ゲスト：鹿熊 勤（ネーチャージャーナリスト）

秋月氏：「密放流を防ぐ手だてがない現状では、バス釣りを禁止する以外に方法がない」持続的に釣りを振興するためにも「バス釣り禁止、完全駆除」を行うべきだと訴えた。

中井氏：琵琶湖の外来魚問題について、南湖の定置網では9割以上がオオクチバスとブルーギルで占められた例を引いて説明し、緊急避難的な措置としての有効な駆除方法をみんなで議論、検討することを期待したいと述べた。

安田氏：八郎潟のバス漁獲量は年10～20トンになっているが、八郎潟のブラックバスはピークを過ぎて自己淘汰の時期に入ったのではないか。しかし、数が少ないため漁業の対象となっていない30数種の魚は、やがて八郎潟から姿を消すのではないかと警告した。

鹿熊氏：1992年に水産庁がブラックバス、ブルーギルの移植放流を制限する通達を出し、地方自治体も規制措置をとったが、新種のコクチバスが急激に全国に広まっている。バスフィッシングを取り巻く問題について報告した。

引き続き、参加者とパネリストとの質疑応答が行われたが、最後に杉山代表が次のように訴えて締めくくった。

「昭和57年11月、秋田市からす沼で本県第1号のバスが見つかった。そのとき鑑定したのが私だったが、残念ながら外来魚に対する危機感を持ち合わせていなかった。もしその時に危機感を持っていたら、今日のシンポジウムも開かずに済んだかも知れない、と自己反省している。田沢湖のクニマスのように、在来魚を絶滅させた過ちを二度と起こしてはならない。今後は、ブラックバスの駆除はもちろん、コクチバスを入れない、ブルーギルを拡大させないよう、一人一人が呼び掛け人になって行動を起こしてほしい。」

※ なお、「ざっこシンポジウム」の内容は、秋田県農地計画課ホームページに掲載されています。

[閉じる]